

ヴェブレンの経済学方法論と文明史観

石田 教子 (日本大学)

E-mail: ishida.noriko@nihon-u.ac.jp

はじめに

ダーウィンの進化論の影響を色濃く受けながら、19世紀末から20世紀にかけてヴェブレンが展開した経済学批判は、経済学の再建を方法論的に求めるような主張を含んでおり、現代においては制度経済学や進化経済学として知られる分野の先駆と見なされている¹。それは、物理学や化学を例に挙げていた点では科学一般を対象とする純粋な論理的ないし方法論的議論であったとも解釈できるが、別個に論じられているように見える文明史とあわせて読み解くなら、若干違った様相が浮かび上がる。それは、科学の考察がどのようなプロセスで進行するかという狭い意味での科学論にとどまるのではなく、科学者の精神習慣が人類史のなかでどのように育まれてきたのか、さらには科学的知識が社会においてどのように利用されてきたのかに関する諸論をも含むより広がりのある科学論であったと解釈できるからである。

例えば後者の点について言えば、ヴェブレンは、レッセ・フェールのような政治的信条が科学としての経済学の考察を規定することには批判的であり、たえず事実に立脚することを強く求めた。しかし、彼の文明史観にも目を配ることで分かるのは、そうした観点から事実に即した科学的考察の重要性をさかんに強調したにもかかわらず、科学的考察と実践的問題解決という二つの知の領域をただ分離することが彼の意図だったのではないということである。純粋な科学主義者というある種のありふれたヴェブレン像——「道徳化の試みをすっかり根絶し、経済学を『科学』に還元する」ヴェブレン、「倫理的相対主義者」および「科学的ニヒリスト」等²——は間違いではないが、正確でもない。本報告は、むしろ理論と実践の間に引かれた19世紀的区別を乗り越えるような視座に立脚していた人物としてヴェブレンを解釈するとともに、彼の経済学方法論をそのように理解するための鍵が、彼の文明史観に埋め込まれた人間本性論にあることを示す。

I 機械論か目的論か

ヴェブレンの経済学批判を方法論上の問題提起と捉える場合、重要であるのは目的論 (teleology) という概念である。一般に19世紀半ばの生物進化論は新しい科学方法論のモデルを提供したと言われるが、多くの場合、科学的であることは目的論からの脱却を含意していた。進化論をモデルとする科学は経験科学にほかならず、目的の設定には一切関わるべきではないからであり、彼の進化論的経済学も目的論を排除したところにその特徴があると考えられてきた。この特徴づけは決して的外れではなく、事実、彼は古典派その他の経済諸思想に目的論の残滓を見いだしては、それを厳しく批判するというスタイルを取っていた。だが、この解釈の難点は、そう結論づけようとする、不可解なテキストが別の文脈において多数目に付くようになる点である。

例えば、ヴェブレンは、既存の経済諸理論が予め理想的な社会像を想定していることを目的論的な偏見の現れであると批判し、機械論的な方法の採用を薦めたにもかかわらず、経済学が主題としなければならないのは目的論的な人間の行為であるということも繰り返し主張した。目的論の概念はこのように排除されたかに見えては、繰り返し蘇ってくるのであり、一見裏腹に見えるこの主張はどのように理解されるべきだろうか。推測しうるのは、彼が同じ目的論という概念を用いて一方ではそれを拒絶しているように見せかけながら、他方ではその概念に新たな意味を吹き込もうとした可能性である。ヴェブレンは、確かに目的論の概念を既存の経済諸思想の欠陥を明るみに出すために用いたが、それだけではなく方法論上の再建によって経済学が取り戻さなければならない「範疇」を示唆するためにも用いたからである。さらに、目的論を批判し機械論を科学の象徴として用いる文脈は確かに多いが、厳密には、機械論的な方法が貶められている文脈も入

¹ 本報告が扱うヴェブレンの議論は1890-1900年代が中心であり、主として足掛かりとする先行研究は1990年以降のW. サミュエルズやG. M. ホジソンらの研究である。詳細は報告者によるサーベイ (石田2009) を参照。

² 順に、F. H. ナイト (1920)、W. サミュエルズ (1990) およびA. K. デイヴィス (1945) らの言葉。ただし最初のものはナイトの解釈ではなく、通俗的なヴェブレン像として彼が挙げたもの。

り交じっている。以上のことから考えられるのは、彼はただ目的論を排除することを提案したのではなかったし、目的論の代わりに機械論の採用を求めたわけでもなかったということである（石田 2012）。

こうした機械論と目的論をめぐる問題に注目する場合、この論争史における I. カントの思想史的位置を念頭におく必要があるだろう。若き日のヴェブレンが選んだ研究テーマはカントの第三批判『判断力批判』であったが、本書の主題は目的論と機械論の二律背反の調停に定められていたからである。ヴェブレンは、美および崇高の理解から始め、世界の調和に関わる認識へと向かい、道徳的自由の問題へと進むカントの議論に改変を加えた上で、帰納的推論の方法論的意義を論じた。だが、それは、科学的思考に関わる純粋な論理学的ないし方法論的議論ではなかった。それは、理論理性と実践理性とを架橋するために判断力という認識能力を新たに導入したカントに沿いながら、科学的思考が日常生活における実践的指針をいかにして提供するかということを問題にしていた。ただし、ここで注意しておきたいのは、演繹ではなく帰納の重要性が力説されたとはいえ、両者は真つ向から対立する方法と見なされていたわけではない点である。両者の違いは規定的か反省的にあり、対立する方法というよりはむしろ「類似した性格の諸法則」（Veblen 1934, 185）に制御された方法であったからである。以上のことから言えるのは、彼は極端な演繹論者でないことはもちろんであるが、演繹法の代替案として帰納法に偏重する素朴な経験主義者でもなかったということである。そして、この最初期の哲学研究時代（1880 年代前半）の問題——科学者は事実をいかに認識するかという問題——は、経済学研究を本格的に開始した後でも（1890 年代）彼の関心事でありつづけた。

II 新たなリアリズムの地平を目指して

すでに見たように、機械論か目的論か、帰納か演繹かという二者択一を迫るような論法は、はじめからヴェブレンの眼中にはなかったと考えられる。したがって、1890 年代後半から経済学方法論を論じ始めたときに、アメリカ版歴史学派の一人と分類されることもあるヴェブレンが、理論を重視した古典派経済学のみならず、同時に歴史を重視したドイツ歴史学派に対しても厳しい評価をつきつけたことは驚くべきことではない。経済学を進化論的科学へと導くのは、事実在即する精神習慣（matter-of-fact habit of mind）であるとヴェブレンは論じる（Veblen 1919, 84）。しかし、ただ単に事実を入念に取り扱うという意味でのリアリズムが直ちに経済学を進化論的科学にするわけではないのであり、「広く受け入れられている歴史学派の経済学ほど進化論的科学であることから遠い経済学はない」（Ibid., 58）。では、歴史学派のどこに欠陥があるのかと言えば、彼は「何らかの理論を提示したり、それらの帰結を一貫した知識体系へと精緻化したりしようとは考えなかった」（Ibid.）点を挙げた。

他方、古典派経済学の理論化の方法に対する批判も厳しかったことは周知のところである。例えば、古典派が想定する均衡概念には暗黙のうちに改善に向かうような傾向が内在しており、現象を正常と見なす誤りにつうじるという批判がなされた。さらに、正常であること（the normal）が正しいこと（the right）と重ね合わされるなら、意識的か無意識的かは別としても、「経済学者がある社会的制度を『是認し』、別のものを『否認する』こと」（Ibid., 166）につうじることとなるだろう。しかし、それらを安易に同一視すれば、そのような認識は「大衆の偏見」（Ibid.）と大差ない。それらは「本質的に無関係な二つの諸原理あるいは範疇」（Ibid.）であるからである。

経済学における方法論争が下火になりつつあった 19 世紀末という時期に、どちらかに迎合するのではなく、アメリカという後進の地から古典派とドイツ歴史学派に対する両面批判を行わなければならなかった世代の一人であるヴェブレンは、こうして理論や一般化の必要性を認めながら、同時に歴史の相対性および累積性を把握する重要性にも配慮するような新たなリアリズムの地平を目指したといえる。

III 事実在即する精神習慣と目的論的な範疇

進化論的経済学の考察は事実在即していなければならない。このヴェブレン流リアリズムの全容を解明する鍵は科学者の事実在即する精神習慣という概念の解釈にある。明確な定義はないが、少なくとも次の三つの論点が手がかりとなるだろう。

第一に、事実に即する精神習慣は D. ヒュームの方法と結びつけられていた。ヴェブレンの説明をそのまま引くと、ヒュームの方法は、「批判的態度、帰納的方法、そして時には唯物論的もしくは機械論的方法、さらにあまり適切ではないけれども歴史的方法と呼ばれてきた」のであり、その方法を一言で特徴づけるなら「事実問題の強調 (insistence on matter of fact)」である (Ibid., 97)。

第二に、事実に即する精神習慣は目的論的な思考法の対義表現であった。例えば、ヒュームが「あまりにもモダンすぎる」のは、「日常の物事の推移についての一連の経験的叙述的一般化を、現象の目的論的な説明に付け加えること」には甘んじなかったからであった (Ibid.)。ヴェブレンによれば、西洋の科学的思考を導いてきた観点には二つある。一つは事実に即する観点であり、「因果的な継起や相互関係の議論」をもたらすのに対して、もう一つは目的論的な観点であり、「目的論的な継起や相互関係の議論」をもたらす (Ibid., 100)。彼は、前者が大陸よりもイギリスで広まった観点であると解釈し、「イギリスでは帰納の割合がずっと大きい」(Ibid.) と補足している。それに対して、後者は両者が共有する観点とされたが、「イギリスにおいてはその色調はずっと薄い」(Ibid.)。さらに、後者は「アニミスティックな観点」(Ibid.) とも言い換えられ、その例としては「自然神学、自然権、道徳哲学および自然法として知られているもの」(Ibid., 109) が挙げられた。そして、科学史とは「アニミズム解体の長く曲がりくねった道」(Ibid., 64) であった。

こうしてみると、事実に即する精神習慣に導かれる進化論的科学は、目的論とは対立的な方法であり、帰納や歴史、機械論に親和的な方法なのであって、アニミズムを脱ぎすて初めて到達しうる方法であるかのようである。だが、次に見るように、事実に即する精神習慣にはもう一つの意味があり、そのようには言い切れない。

再びヴェブレンのヒューム論に戻ると、「人間の問題に関する裏側とまでは言わないまでも、平凡な側面の強調」(Ibid., 96) がイギリスに、そしてヒュームに見られる。この人間の問題ないし平凡な側面に対する眼差しこそは事実に即する精神習慣のもう一つの意味である。ヴェブレンは、経済学の方法論上の再建が「量的な範疇」だけではなく「目的論的な範疇」にも目を配ることによって達成されると考えていた (Ibid., 179)。目的論的な範疇とは何か。それは、「習慣、性向、適性および慣例」(Ibid.) 等、人間の行為に関わる範疇にほかならない。例えば、彼は J. S. ミルや J. E. ケアンズらの事実認識の方法を積極的に評価したが、それは、社会的諸制度——例えば階級による差異や習慣および伝統——が経済現象に与える影響が重んじられていたからであった。そして、彼はこうした経済学方法論史上の変化について、「[経済学の定式化において——引用者]人格が、したがって目的論の意味が事象の継起から削除されるとともに、人間主体の行為に対するそれ [目的論の意味——引用者]の帰属が増加したこと」(Ibid., 158) により生じたと解釈した。経済学が自然的法則を求めて一般化を行うなら、それは経済社会を動かす原因を人間の行為ではなく自然の事象のうちに探ることに等しい。だが、原因を人間の行為のうちに求めようとすれば、事象の継起から目的論の意味が削除され、人間の側にそれが付加されることとなる。そうした経済学の一般化においては、人間はいかようにも変化し適応していく可能性を得るだろう。したがって、政治、法および経済その他一般に関わる人間の諸制度も変化するのであるから、人間に関わる探究も静態的な観点にとどまることはできず、動態的な観点に導かれる。ここに歴史ないし進化を論じる余地が生まれてくるということなのだろう。事実に即する精神習慣を基礎として、人間の行為を主題にしようとする動態的な観点が「進化論的科学」と呼ばれた理由はここにあるといえる。

IV 科学者と産業技術

上記の議論から判明するのは、目的論と事実に即する精神習慣という二つの概念の両義性である。目的論の概念は事実に即する精神習慣の対義表現であったが、事実に即する精神習慣は人間の行為の目的論的な範疇に目を向けることそれ自体をも意味していた。ヴェブレンの目的論の概念にはこのように二重の意味がある。つまり、一方では、事実に即する精神習慣は、事象の継起に目的を帰属する目的論から脱却しているという意味において科学的な思考を指しながらも、他方では、目的論的に行為する人間を主題としなければならないという課題を背負っていた。換言すれば、事実に即する精神習慣は、一方では、レッセ・フェールの

ような政治的信条に振り回されてはならないという意味において事実立脚することを求めながらも、他方では、人間の問題ないし平凡な側面に対して眼差しを向けようとしていた。これらのことから分かるのは、科学的思考を純化するために実践的問題解決の領域を棄て去ることが彼の目的であったのではなく、人間の問題ないし平凡な側面に眼差しを向けるというまさしく実践的な意図に支えられながら、科学者が事実を取り扱う仕方が模索されていたということである。

そして、こうした論理的ないし方法論的な議論の間に挿入されている一見異質にも見える彼の文明史的考察は、次に見るように、事実即精神習慣の理解を深めるためのさらなる手がかりを与えてくれる。

ヴェブレンの文明史的考察は、科学者の精神習慣が人類史においてどのように育まれてきたのかという問題に及んでいる。それは、科学者にとどまらず、人間そのものの本性を解明しようとするような視点であった。それによれば、人間の行為ではなく事象の継起に目的を帰属する目的論的な観点の源泉は、人格の優劣の区別を教え込む身分体制 (Ibid., 106)、そして妬みを起こさせる比較を行う文化 (Ibid., 107) である。それに対して、事実即精神習慣の源泉は「近代産業社会における生活の必要」 (Ibid., 84) であり、その観点はいかなる文化段階においても不可欠である (Ibid., 103)。なぜなら、それは「産業的生活から必然的に生じる選択的な帰結であり、実際に物質的な生活手段を利用するさいのあらゆる人間の経験から必然的に生じる選択的な帰結」 (Ibid.) として生じてきたからである。そして、彼によれば、この精神習慣は文明が高度になればなるほど重んじられるようになる。というのは、高度な文明においては、「産業の効率性 (industrial efficiency)」 (Ibid.) を無視することは事実上不可能となり、そのような意味で文明の発展は産業技術の進歩と軌を一にしているからである。

事実を取り扱うことが事実を列挙することにとどまるか、あるいは事実を解釈するさいに淡々と機械論的な連続性を帰属し、それにより諸事実から一般化を行うことに限られるのであれば、事実即精神習慣は一種の純粋な科学的考察であり、実践的問題解決とは一切関わらないのかもしれない。だが、事実即精神習慣の源泉が産業の効率性を高める人類の営みに端を発しているというヴェブレンの文明史観は、それとは似てもつかない科学像を浮かび上がらせるように思われる。産業の効率性を高めるという目標こそが事実即精神習慣を育むとともに、人類の技術的発展ないし機械的発明を推し進めてきたということ、そして、そのことが、人々が物質的な生活手段を利用し、自らの暮らしを切り開いていく営みと不可分であったというヴェブレンの文明史観は、経済学が再建を果たし、進化論的科学に到達したさいに、その担い手である経済学者がそうした目標や営みをもたないわけではないということを私たちに想像させるからである。確かに、ヴェブレンは「実践的諸目的が科学的探究の領域に含まれること」 (Ibid., 16) も、「科学者が技術的改善を目指すこと、あるいは目指しうること」 (Ibid.) も決して認めることはなかった。だが、たとえ「これらの諸目的は科学者の関心の外にある」 (Ibid., 17) としても、事実即精神習慣が、少なくともその精神習慣それ自体が生じる大本の出発点において、上記のようなすぐれて実践的な動機にすでに誘われていたということは見落とすにはあまりにも重大な論点であるように思われる。仮にヴェブレンの科学論が実践的問題解決を担うはずの知の領域と完全に切り離されているわけではないという報告者の結論が憶測にすぎないとしても、彼の科学論がこうした文明史的考察を含むより広い視野を有する科学論であったという事実は残されるだろう。

おわりに

20世紀の初頭に G. E. ムーアが自然主義的誤謬という用語を用いて行ったような批判を、ヴェブレンはそれに先駆けて繰り返し行っていた。自然であることに正常であることを読み取り、それを正しいことと読み替えば、そうした経済理論は科学的認識とはいいがたい。そのことをヴェブレンは目的論の残滓だと糾弾した。

しかし、この論点を徹底的に押し出した彼が、政治科学および社会科学を「医学」 (Ibid., 56) になぞらえた G. V. ラプージュの言葉に共感していたことはあまり強調されない。19世紀末期に、ラプージュは文化人類学が起こす方法論上の革命が、細菌学が医学に対して起こした革命のようなものとなるだろうと予想した。

ヴェブレンにとって、医学のような実践的領域が経済学に当たるのか、あるいはそれ以外の何かであるのか、その答えは依然明らかではない。だが、それでもなお、ヴェブレンの科学論には、科学の論理的ないし方法論的議論の枠からは大幅にはみ出すような文明史的考察が挿入されており、その中心には科学的思考に関わる人間本性論があった。人間が本質的に目的論的な存在であるという認識、そして人類が産業の発展とともに歩んできたという認識が土台となっているからこそ、彼の科学論においては、人間が、それゆえに科学者が産業の効率性を維持ないし向上させることによって、社会の一般的福祉を考慮し続ける可能性が残されているように見える。そのようにして、ヴェブレンは、19世紀の経済学が見失いかけていた理論と実践の架橋という問題を、人間の本性を目的論的と見なす彼独自の視角によって乗り越えようとしたと言えるのではないだろうか。

主要参考文献

石田教子 2009. 「進化思想とヴェブレンの経済学構想—近年の諸研究に関するサーベイ—」『紀要』（日本大学経済学部経済科学研究所）39: 39-64.（※報告者のウェブサイト <http://www.eco.nihon-u.ac.jp/~ishida/NIW/Publications.html> からダウンロード可能です。）

———2012. 「ヴェブレンの進化論的経済学における目的論の位置」『経済学論纂』52(3): 111-40.（※コピーをご希望の場合は E-mail でお知らせください。）

Veblen, Thorstein 1919. *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays*. New York: B. W. Huebsch.

———1934. *Essays in Our Changing Order*. Edited by Leon Ardzrooni. New York: The Viking Press.